

田山花袋

アルフオンス。

ドオデエ



アルフォンス・ドオージェ



アルフォンス・ドオデエは仏蘭西における新興文芸の驍將で、フロオベルやゾラの起こした写実主義に参して、大いなる功績を十九世紀の文壇に残した。

フロオベルにゴンクール、ゾラにドオデエ、吾人はこの二組の名を並べて人のよく口にするのを聞く。千八百五十年時代を前二者が代表したとすれば、千八百六十年以後は後の二名が代表したと謂つて好い。そしてゾラは暗黒を描き、ドオデエは光明を描いた。

読書趣味の健全なのを誇りとしている英国の読書社会を見渡して見ると、二人の傾向と特色とがよく解る。英国ではドオデエの全集は立派な装釘で、詳しい伝記まで附けられて公にされているが、ゾラの全集はまだ出版したという噂を聞かない。英国人はゾラの忌憚なき露骨な描写を憎むこと蛇蝎の如くである。好奇心で読んでも、あとはすぐ捨ててしまう。これに較べると、ドオデエの評判は大したものだ。ヂッケンスの再生だとまで言っている。英国人が近代文学の唯一の誇りとしているヂッケンスに比べるくらいであるから、ドオデエの明るい、楽

天的な作品がいかにも英国に歓迎せられるかが推量される。

大陸文学者で英国に歓迎されるのは、ドオデエ、ツルゲネーフ、メエテルリンクなどである。その中でもドオデエの読者の範囲が一番広いようだ。ドオデエの特色はユーモアに富んでいて、そして余り痛い皮肉がなく、事件人間を取り扱うにも自己の趣味を余程多く加えてある。新聞小説的に面白く、筋を運んだものもあるし絢爛な文章で貧しい内容をごまかしたような処もある。仏蘭西初期の自然主義の中では、著しくアイデアリスチック

な色を帯びている。

フロオベルなどにもロマンチックな処はある。けれどもそれは文を書く上の用意や、観察の仕方などにあるので、作者としての態度は全く客観的である。草や木を見ると同じように人間を見ようとしている。その作者の趣味やら好悪やらは加わっていない。ドオデエにはこの態度が乏しい。余程作者の趣味がその中に入っている。

文章の絢爛なことは、仏蘭西文学者中にも彼に比すべきものは沢山はない。彼も又実際文章には骨を折っている。けれどフロオベルやモウパッサンなどと比べると、



その骨折り方が違う。フロオベルやモウパッサンはその事実と印象とを完全に現す上に於いての鏤骨彫心の努力をしているが、ドオデエのはそうではない。文章を文章として書いているような空疎な処が見える。同じリアリストでも、余程趣が違う。

自然派の作家は手帳と鉛筆を隠袋から離したことはない。ゴンクールでもゾラでも、ノートの上にノートを築いて、そして一篇の小説をつくり上げる。ドオデエもやはりそうであった。書こうと思う処へはよく出かけて行った。妻と子とを伴って、よく一緒に出掛けるので、ド

オデエは北海の鯨のようだななどと言われた逸事がある。ノートは随分作った方だ。けれど性質が敏活で、傾向が楽天的であるから、そのノートがいつも自己の趣味と感情とに支配されて、ゴンクールやフロオベルのように客観的でいることが出来なかつた。

ドオデエは仏蘭西近代文学に於ける短篇作者の祖である。ドオデエの作品が長篇よりも短篇に長けていることは、一般の輿論で、『俄分限者』『流竄王』『ヂヤツク』などよりも『粉小屋より』『月曜物語』などにある短篇の方が、作者の長所を發揮している。就中普仏戦役に関

する短篇は、かれが名を世に知らるるに至ったもの、大いに当時の時好に投じたのである。けれどその傾向はやはり文章中心で、アイデアリスチックなところが非常に多い。

仏蘭西の短篇作者では、——巴里風の気の利いた短篇では、ドオデエと、コツエと、それから稍々後から出たモウパッサンと、この三人である。モウパッサンの短編に比べると、ドオデエのは、余程明るい。所謂同情に富んでいる。楽天的である。描き方に気が利いているのは同じであるが、ドオデエのは少し執拗い。その代わ

り文章の絢爛なのや、着想の理想的なのを好む人には、読んで忘れ難い味がある。従って、近代文芸の特色なるアイロニカルなアクチーブなところは何処の頁を探しても見ることが出来ない。ドオデエその人はゾラやモウパッサンのように根性の悪い性質ではない、温厚篤実な感情的な君子人であったのである。英国人に愛読せられるのも道理だ。

ドオデエの作に『リットル、グート、フォア、ナツシング』と言うのと、『巴里の三十年』というのがある。これにはドオデエの自伝らしい生い立ちが書かれてあ

る、『リットル、グート、フオア、ナツシング』にはその少年時代の家庭の衰退、不幸なる生活と学校教師などのさまがよく描かれてあつて、彼が少年時代をいかに過ごしたかを明らかに知ることが出来る。彼は南方仏蘭西の小さな町に産まれた。その年は千八百四十年であつた。十八歳の時、どうかして文学者にならうという考えで、その頃兄のエルネストが巴里である会社の書記をしているのを頼つて上京した。その時の光景は『巴里の三十年』の中の『到着』という最初の一章によく出ている。兄のエルネストが停車場に迎えに来て、車に荷物を積んで斧

下宿に帰る途中、とある下等な料理屋で朝飯を食う処など眼に見えるようだ。それから下宿屋の二階にいて、空想に耽ったりどうかして少なくとも一二年は書生生活をした。『巴里の三〇年』の中に、蠟燭を一本立てて髪のを長くして熱心に原稿を書いている挿画がある。ドオデエその時の心を記して曰く、「雑誌店の前に立ったり、劇場の前を歩いたりして、所謂当代の大家の得々としたさまを見ると、若々しい奮励の念が漲るように胸を刺して、一本の蠟燭を携えたまま、階段を音高く立てて登り、一生懸命筆を執った」と。このとき作ったのは多くは詩

で、後にこれを出版しようと思つて、彼方此方の書肆を歴訪して断られた時の心地もその章の中に書いてある。その後、一篇の小品を巴里の有力の新聞『フィガロ』に送つた。ところがそれが幸いに主筆の目に留まつて、時々掲載されるようになったので、段々青年作者として世に名を知られるようになり、多くの当代の文人とも交際した。兎に角ドオデエの青年時代——巴里書生時代は、ゾラなどに比べると、余程多幸で、間もなく当時の大臣の秘書官になつて、非常に可愛がられたため、生活上の苦悶もなく、時々は彼方此方に旅行することさえ出来た。

六十年から六十七年くらいまでは、短篇を多く作った。有名な『粉屋より』は六十三年頃から始めた。この間、彼は絶えず旅行をしていたので、その見聞は多くその頃の短篇に出ている。『月曜物語』を読むと、地中海の海岸のことや、コルシカのことや、アルゼリアの風俗などがよく書いてあるが、これは皆その旅行の賜である。そうしている中、例の普仏戦争になった。この戦敗の悲劇に対しては、彼は愛国的悲憤を痛切に感じた一人で、その事件と活劇とを書いた短篇は随分多い。『伯林の包囲』『最後の教課』『新教師』『アルサス、アルサス！』な



ど皆一種仏蘭西人的の感情の熱い血が流れている。それから比較的長いもので『ロベル、ヘルモン』というものがある。画工が巴里の近郊セナルの森の隠れ家に身をひそめて、普軍の進入を見ている趣向で、文章にも頗る新しい処がある。長篇では六十八年に『リットル、グート、フォア、ナツシング』を書いたが、その翌年妻を娶り、七十一年に、その出世作『タアタリン、オブ、タラスコン』を書いた。

この作は有名なる滑稽小説で、作者の故郷に近いタラスコンの町の出来事を材料にして、軽快なる筆を揮った。

この作が当たったので、ドオデエは同じタアタリンという主人公を材料にして、『タアタリン、オブ、アルプス』を書いた。

けれどもまことの意味に於いて、文壇の大家となつたのは、七十四年、三十五歳の時に『フロモンリスリー』を書いてからである。

今重なる著作を挙げれば、『リツトル、グート、フォア、ナツシング』『粉小屋より』『タアタリン、オブ、タラスコン』『フロモンリスリー』『月曜物語』、『ヌマ、ルーメスタン』『俄分限者』『流竄王』『サツホー』『タ

アタリン、オブ、アルプス』『ロベルヘルモン』『ヂャック』『エヴンジェリスト』『フォートタアタリン』等で、その他『巴里の三十年』『一文人の追懐』という二冊の追想録がある。千八百九十一年二二年頃に『ゼ、ベット、オブ、ファミリー』という作を公にしたが、これは余り成功した方ではなかった。『わが劇の最初の印象』は『巴里の三〇年』の中に書かれている。

千八百九十七年に、劇場で突然発病して死んだ。余り急なので、一時は刺客に逢ったと誤伝されたくらいであった。年は五十八歳である。

ドオデエが作には、巴里の影響が非常に多い。世界著名の美術の都会は確かに彼の一生の頭脳を支配した。彼の作を読むと、巴里の空気が髭髯として身に迫って来るような心地がする。それから彼の作品に影響した今ひとつは、フロオベル、ゴンクール、ゾラなどと交際して、所謂「リアリスチックスクール」に参したことである。ドオデエの如き性格では、この写実主義の影響を受けなかつたならば、純ロマンチック風な作者になつたのは、言うを待たぬことで、作品中に見える精密なる描写は遂に見ることを得なかつたであろう。晩年にはゴンクール

との交情親密に、彼のシャンブロセーの別荘は常に平和なる団欒の場となった。彼の長男は父の跡を襲いで、文学家の一人となったが、今でもその名は余り高くないということだ。

要するに、ドオデエは仏蘭西自然派の中では主として明るい方面を書いた文章の旨い作家であった。



日本文学電子図書館

---

アルフォンス・ドオデエ

著 者：田山花袋

制作者：宮澤一郎

底 本：「花袋全集 第11巻」

花袋全集刊行会

大正12年7月20日 印刷

大正12年7月24日 発行

日本文学電子図書館